大阪市立大学文学部

Faculty of Literature and Human Sciences

2006

OSAKA CITY UNIVERSITY
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138　TEL:06-6605-2353　URL:http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/

文学部の歴史

文学部は1953年に発足しました。今日までの歴史を振り返り、そして未来を展望してみましょう。

大阪市立大学の発祥は1880年にまで遡りますが、文学部は1949年に市立大学に創設された法文学部文学科を前身としています。12専攻（哲学、社会学、心理学、教育学、芸術学、歴史学、地理学、国文学、中国学、英文学、独文学、仏文学）、20人の教員スタッフでスタートし、翌年には第２課程（夜間）も設置されました。そして、1953年には、「産業大都市大阪には文学部の存在が絶対に必要」という恒藤学長の強い信念に支えられて、文学部が創設されました。スタッフも大幅に拡充して88名になりました。翌年には修士課程、その翌年には博士課程も設置され、第２次大戦後の新制大学としては異例の早さで大学院の充実がはかられました。しかし、当時は現在の杉本町ではなく、市内の西区や南区に講義棟などを設けていました。市大は敗戦後の連合軍の施設として接収され、米軍のキャンプ・サカイになっていたのです。

1956年に文学部は杉本キャンパスにもどってきました。文学部の拡充は続き、1968年からは5学科12専攻となり、大学院も整備されて旧帝国大学系を上回る規模のスタッフを有するようになりました。実学重視といわれる大阪の学問的気風のなかで異彩を放つこととなったのです。

その後、平穏を取り戻した文学部は、「新しい都市型総合大学としての市立大学の充実、国際都市・大阪の特性を生かした学術研究を進める」という大阪市総合計画21の指針にしたがって、次の展開へと歩みを進めました。その具体的な形は1990年代の画期的な施設整備に端的に現れています。日本一の規模を誇る、図書館と情報機能が総合された学術情報センター。さらに文学部のピンクの増築棟と、旧校舎の全面的改修。

組織もまた1999年に3学科15コースに改編され、新たに表現文化と言語情報コースが登場しました。2部も2005年に3専門領域からなる人文学科に改編されました。また、大学院の教育研究を重点化するべく、2001年から正式名称が大阪市立大学大学院文学研究科・文学部となりました。そして、2002年、世界最高水準の研究教育拠点を目指す文部科学省の「21世紀COEプログラム」に採択され、名実ともに全国の文学部の拠点大学として着実に実績をあげています。なかでも、他に類例をみないアジア都市文化学専攻が大学院に設置され、アジアへの太いパイプができることとなったのも大きなセールスポイントです。

IT関連の情報処理室、心理学実験室、地理情報システム（GIS）処理室、比較言語文化情報処理実験室、ガムラン実習室、音のデジタルアーカイブなど、ハイテク機器をふんだんに導入しながら、学部から大学院の博士後期課程までの一貫した教育研究環境が整えられています。学生の自主的な研究活動や就職活動を促進する「文学部・文学研究科教育促進支援機構」も発足しました。また、ハンブルク大学（ドイツ）、チュラロンコン大学（タイ）、ガジャマダ大学（インドネシア）、国立芸術大学（インドネシア）、華東師範大学（中国）、「恵光」日本文化センター（ドイツ）、ロンドン大学東洋アフリカ学院（イギリス）と学術協定を結び、共同研究を行っています。さらに、リヨン大学との学生交流も始まります。

米軍のキャンプ・サカイ

学術情報センター

文学部棟

2005年　8月発行

言葉への信頼

文学部の最大の特色は、言葉と対峙するところにあります。いきなり大上段の言い方になりましたが、文学部には、いわゆる「文学」だけではなく、様々なコースがあって、そのヴァラエティには目を見張るものがある。それでもなお、全コースに共通しているのは、言葉への信頼です。当たり前のことですが、私たちは思考の大半を言語に委ねている。そして、あらゆる研究の最終段階では、言葉でもって表現することになる。言語による作品づくり、それが文学部における最も基本的な作業なのです。

というと、なんだか辛気くさい学部のように思えるかもしれません。言語は様々なコミュニケーションの一部分である、ということはもはや常識になっていますから。確かに、音楽、映像、マンガ、ダンス・・・など、魅力的なコミュニケーションのツールはたくさんある。そのなかで、私たちは言語の可能性、豊かさを、とことん追求してゆきたいと思っているのです。

もちろん、私たちは簡単に「自分の言葉」を発見することはできません。どんなコースに進んでも、そのコースが対象としている様々な現実にぶつかります。それは古代の絵図であったり、内田春菊のマンガであったり、ネズミの行動であったり、野宿者の語りであったり。そのとき私たちは、いったん言葉を引っ込めます。それらを月並みな言葉で解釈するのをやめ、全身でもって受け止めようとします。つまり、いちど言語から遠く離れ、感覚を総動員し、言葉にならないものにまで、「私」という網を投げかけ、あらゆる対象にぶつかってゆくのです。まるでハンターのように。

それらは大波のごとく私たちを揺さぶりますが、そのうちに潮は引いてゆき、砂浜はキラキラと輝き始めます。そのなかから、私たちは宝石のような言葉を発見するのです。もちろん、こぼれ落ちるものも数多くある。言葉は万能ではないということも知る。言葉の限界を知ること、そこに、ようやく「人間発見」の糸口が見えてくるのです。

話が抽象的になり過ぎたかもしれません。いまいちど、受験という現実に戻ってみましょう。向こうから、文学部を志しているふたりの受験生が歩いてきました。

迷えるふたり

みほ：文学部に願書出すんやて？　経済学部に行って一流企業に就職したい言うてたのに、何でまた？

かず：そらおまえが文学部に行く言うから、離ればなれになるの寂しいしな。

・・・あのなあ。

冗談や冗談。けどな、いまどき、どこの学部行っても就職厳しいで。商学部とか経済学部とか法学部かて、文学部とあまり変わらんらしい。かえって文学部の人間のほうがユニークやて、取ってくれる企業もあるらしいしな。

それにしてもや、なんで文学部なん？

じつはな、おれ、もともと考えることに興味あったんや。子どもの頃からずーっと気になってることがあってな。文学部行けば、その答えが見つかるかもしれん。少なくとも、何をどう考えればいいんか、手がかりがみつかるような気がするんや。

そうなんや。でも、気になってることって？

うーん、人にそれ言うの、ちょっとややこしいんやけどな。そやな・・・じゃ、おまえだけやで。他のやつには言わんといてな。小学生の時や、ひとりで学校行く道を歩きながら、ふと「おれ、ここで何やってるんやろ？　なんでおれはここにいるんやろ？　なんでおれはこの町に住んでて、小学生なんやろ？」って思ったんや。そしたらな、そのとき、いつも見慣れてた風景がとつぜん新鮮なものになったというか、それまで当たり前やと思てたことが、当たり前に思えんようになってきたんや。

ふーん。なんや、わかるような気もするけど。

たとえばな、なんで木の葉は緑で、空は青くて、雲は白くて、タンポポは黄色く見えるんやろか？　なんでここに川が流れてるん？　なんでここは麦畑やなくて田んぼになっとるん？　なんでこの田んぼは四角くなくて扇形してるんやろ？　おれ、なんで学校に行かなならんのやろか？　なんで学校なんてもんがあるん？

はぁー、悩み多かったんやな。

でも、それ、うちも考えたことある。

国語の時間になると、おれ、なんで日本語しゃべってるんやろ、ってな。なんでおれは日本人なん？　なんでアメリカとかエジプトとかアフガニスタンやなくて、日本に生まれたんやろ？　平安時代とか江戸時代じゃなくて、昭和に生まれたん？　そもそも、日本て、なんで「日本」いうんやろか？　なんで鉛筆のことを「鉛筆」いうて「ペンシル」いわへんの？　アメリカ人が「ペンシル」いうたとき、なんで日本人にそれが鉛筆のことやとわかるんやろ？　で、その日の給食はカレーやったんやけど・・・

あんた、よう憶えてるなー。

いや、それがな、カレー食べながら、なんでこれって「カレー」いうんやろか？　カレーってインドの料理やろ。インドの料理をなんで日本人が食べてるん、とか考えてたらな、ズボンにカレーを思いっきりこぼしてしもたんや。

あちゃー、そりゃ災難やったね。

体育の時間はサッカーやったんやけど、サッカーボールってなんであないな形してるん？　だいたい、サッカーってなんで手使うたらあかんの？

うーん・・・。でも、それいいだしたら、きりないやろ。

そや、ほんまに。けどな、なんか、その日から、おれの人生変わったような気がするわ。それからも、ときどき、そういうことが妙に引っかかってたんや。

もしかしたら、それって、誰にもあるんやない？　けど、そんなことばっかり考えてたら、就職できんわ。うちの家、経済状況きびしいし、最近親が「資格とれ」ってうるさいんや。

文学部でも、教員免許とか、博物館とかの学芸員資格とか、とれるらしいで。それにな、大学とか学問いうのは、もともとは、おれみたいな疑問を考えるところから始まったんやて。こないだな、市大のオープンキャンパス行ったら、文学部の先生がいうとったで。

あんた市大文学部の回しもんかいな。けど、なんや、うちも妙に気になってきたな。当たり前のことって、ほんまは当たり前とちゃうんやろな・・・・・・・・・・。

「考える」ことを考える

当たり前のことに疑問をもつかず君。それに相づちを打つみほさん。ふたりともぜひ文学部に来てほしいのですが、このふたりの会話はとても素晴らしい。互いの言わんとすることを、きちんと受け止めている。

文学部は言葉への信頼を基礎においていると述べましたが、そのために必要な訓練は、相手の言っていることを「きく」ことなのです。言葉は発せられると同時に、きくという行為を欲している。しかし「出す～受け止める」という行為はそんなに簡単に成立するわけではありません。近頃、互いが自分のことだけを語るという一方向的な会話がとても多いのに気づきませんか？　それでは会話や対話にならないのです。言葉への信頼は、このようなコミュニケーションのあり方への批判を通じて確立されてゆきます。さきほど、言葉から遠く離れて、全身で情報を受け止める過程について、少し述べましたが、それは「きく」ことの訓練でもあるのです。

言葉を発する、そして受け止める。その循環の可能性と豊かさを求めてゆくのが文学部です。大学での数年間は、あなたを大きく変貌させる可能性があります。自分自身への「実験」だと思ってください。そして、かず君がある日とつぜん、あらゆる事象に疑問を抱いたように、文学部では、当たり前と思っている（あるいは思われている）事を、もういちど根本的に考え直そうとします。

なんだ、そんなことかと思うかもしれませんが、では、あなたの胸に手をあてて振り返ってください。日常の慣習や常識に絡めとられながら生きていませんか？　それらを改めて問い直していますか？　こんな七面倒なことを敢えてやってみようというのが、文学部なのです。

哲学であれ、歴史学であれ、心理学であれ、教育学であれ、はたまた英文学であれ、中国学であれ、「考える」ということを徹底して訓練します。もちろん、それぞれの学問には独自の方法があり、様々な材料を用いるけれども、究極の目標は、考えて、考えて、考え抜くという力を養うことにあります。だから、考えることが好きな人に来てほしい。あるいは、考えるということを深く考えてみたいという人に来てほしい。もちろん、そのツールは初めに言ったように、言葉です。

みほさんは、文学部で取得できる「資格」のことに触れています。文学部がお勧めの「考える」技術といったものは、「資格」のようにかたちのはっきりしたものではないから、なんとなく頼りない感じがします。しかし、私たちが人間らしく生きるためには、考える技術と知恵が絶対に必要なのです。人生の大きな岐路にさしかかったとき、その能力は最大限に発揮されるでしょう。それはとてもカッコいい瞬間のように思いませんか？

Philosophy and History 哲学歴史学科

Human Behavior 人間行動学科

Language and Culture 言語文化学科

学科とコース

第１部

■哲学歴史学科
哲学・哲学史コース
倫理・宗教コース
日本史コース
世界史コース

■人間行動学科
社会学コース
心理学コース
教育学コース
地理学コース

■言語文化学科
国語国文学コース
中国学コース
英米言語文化コース
ドイツ言語文化コース
フランス言語文化コース
言語情報コース
表現文化コース

第２部

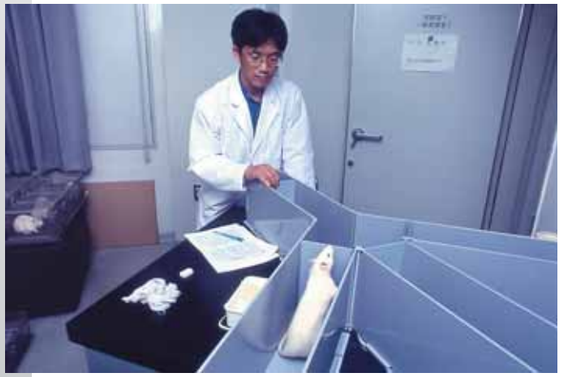
■歴史文化領域

■人間行動学領域

■言語文化・思想領域

「考える」

15の専門コース（第２部では３専門領域）をもつ大阪市立大学文学部では、良く生きるとはどういうことか問うたり、日本をはじめ世界各地の社会や文化の移り変わりを調べたり、現代社会の姿をメディアやフィールドワークを通じて調査したり、人間や動物の心理を実験的に探究したり、人を教えることについての方法や制度を考察したり、古代から現代まであらゆる時代と地域に生まれた小説や詩や演劇や映画や漫画、さらには絵画や音楽などの作品を深く読み解いたり、人間が当然のようにもちいている言葉というものについて、そのしくみや使われ方を考察したりといった多種多様な研究をおこなっています。ですから、少人数が特徴のさまざまな授業に参加していろいろな知識を吸収することは当然可能ですが、最終的には、それぞれの専門分野において掘り下げた学問をもとに卒業論文を仕上げ、社会に出て行くことになります。とはいっても、具体的なイメージは湧きにくいかもしれません。そこで、この数年間に卒業していった先輩たちが、大阪市立大学の文学部に来たことで、何をし、どのような卒業論文を書き上げたか、幾人かの例をご紹介しましょう。



■哲学歴史学科 Philosophy and History

私たち人間が歩んできた道のりがどのようなものであったのか、人間とは何者であるのかを理解することなしには、私たち自身の未来の明確なイメージを描くことはできません。哲学歴史学科は、このような、いわば人間のアイデンティティーにかかわる根本的な問題について、ともに考えてゆくことをめざしています。

「哲学・哲学史コース」のＡくんは、初め、英語サークルで英語劇に熱中していました。２回生の末にスタッフの中心的存在として公演を成功させ、サークルを引退、哲学の勉強に本格的に取り組みはじめましたが、自分の求めていたものとのずれを強く感じるようになり、法学部への転部を目指して、法律の勉強を始めました。けれど、修得単位不足で、転部に失敗。とりあえず文学部卒業を目指して、改めて哲学の勉強を再開したところ、法学の勉強をしたことで、抽象的な哲学の議論がどのような具体的な事柄を問題にしていたのかがよく理解できるようになっていることに気づいたのです。それからは、哲学の勉強にもいっそう身が入るようになりました。

また、「倫理・宗教コース」のＢさんは、短大に在学中、インターネットで見つけた教授のホームページに掲載された講義ノートを読んで感銘を受け、編入学試験を受けて、大阪市立大学の文学部に入学しました。入学後は、授業の勉強ばかりでなく、教授が学外で行っている研究会にも積極的に参加し、同じ分野に関心を持つ他大学の学生や院生、教員と交流して、視野を広げるとともに関心を深めました。卒業論文のテーマには安楽死問題を選び、現在では大学院に進学、勉強を続けています。

「日本史コース」のＳさんの卒業論文の出発点は2回生の時に参加した和泉市との福瀬村史料合同調査でした。そこで初めて生の史料を手にとって見る喜びを知り、3回生の夏には市大日本史研究会の合宿に参加、ここでの報告を契機に日本近世社会のアウトローを卒業論文のテーマとすることとし、4回生のはじめに、具体的な対象としてかつて調査に関わった和泉地域村落の非人番を考察することにしました。いまだ史料集成が行われていない未知の研究領域への挑戦でもありましたが、当初、筆は遅々として進みませんでした。ですが、冬を迎える頃にはむしろ分量が膨らみすぎ、時間との戦いになりました。複雑に絡み合った多様な論理をまとめ、結論を導くのは大変な苦労でしたが、激励してもらった史料所蔵者の方にも喜んでもらえる優秀な論文を完成することができたのです。

そして、「世界史コース」のＯくんの卒業論文テーマは、「マヤの支配権の宗教的源泉」でした。転機となったのは締め切りを半年後に控えた7月、中米の小国ベリーズの洞窟調査隊に参加したことでした。それまで幅広くマヤ文明の交易や文化を学んでいたものの、論文作成のためにテーマを絞り込んでいく必要を感じていたとき、インターネット上で「西ベリーズ地区洞窟プロジェクト」団体のホームページに行き当たった彼は、2週間にわたる現地の発掘に従事する中で、「洞窟」の面白さに夢中になっていきました。そして、学会での関心の低さにもかかわらず、「マヤの洞窟利用」が、非常に重要なテーマであることを実感したのです。帰国後は調査中に入手した洞窟関連の英文資料を読み進めながら、これまで勉強してきたマヤの支配権、宗教権等の論点と「洞窟」を結びつけたユニークな論文を仕上げることができました。卒業後は西洋史専修の大学院に進学して、研究を継続しています。

■人間行動学科 Human Behavior

情報化や国際化の波をうけて大きく変化していく今日、心の世界、人と人とのつながり、人と自然との共生といったことへの関心が高まっています。このような時代にあって、人間行動学科では、観察・調査・実験といった科学的方法に基づいて、人間の行動、われわれをとりまく社会・環境、そして両者のかかわりについて、さまざまな角度から明らかにしていきます。

「社会学コース」のＫ君は、以前から関心を持っていた精神医療の問題を取り上げ、「精神病院の『壁』――社会との共存を求めて――」と題した卒業論文を提出しました。彼のすごいところは、着々と自分の目と足でデータを拾い上げ、自分の頭でそれを整理して他にはない独自の資料を作成していったところにあります。大阪市全域の、すべての精神病院を対象に、既存のデータに加えてその特徴をカメラとノートに写し取り、それを地図上にマッピングして地政学的特徴を整理し、このデータを既存の文献と接合するという、実にオーソドックスな研究を見事に完成させました。卒業後ジャーナリストの道に進むことになった彼の特技がよく生かされた優れた論文でした。

同じコースのＫさんは、在学中「ストリートダンス」サークルにエネルギーを注いでいました。就職活動のために卒業論文作成のスタートが遅れてしまい、テーマ選択に苦しみましたが、最後の時期になって自分が一番よく知っている「ストリートダンス」の世界を取り上げることに決めてからは、その行動力と作成のスピード、集中力には目を見張るものがあり、参与観察、面接調査、文献研究に基づいて、かなり短時日のうちに興味深いエスノグラフィー「ストリートダンサーの世界――気分としての反抗――」を仕上げました。「苦しかったけど、楽しかった」とは彼女の言葉です。このガッツ、就職を決めてきたガッツとどこかしら結びついているようでした。

「心理学コース」のＳさんは、他大学卒業後、心理学コースの３年次に編入学してきました。大学院進学希望だったＳさんは、授業時間内外に積極的に質問し、単位にならない授業にも出席するなど、意欲的に勉学に取り組む姿勢が印象的でした。仲間の学生や院生・教員との研究会でも活発に発言し、また、幹事なども進んで引き受けていました。卒業論文研究では、社会心理学をテーマとして選び、２つの調査と１つの実験をおこなって、それらの成果を卒業論文としてまとめました。卒業後は、希望通り大学院に進学し、研究に励んでいます。

同じコースのＵさんは、卒業論文のテーマとして「学習」を選びました。Ｕさんが選んだテーマは、さまざまな条件でラット(ネズミ)に特定の行動を学習をさせて、それらの条件と学習結果との関係を調べるというもので、長期間にわたって動物実験を行う必要があります。そのために、Ｕさんは、夏休みや冬休みにも毎日のように大学に通って、実験と動物の世話に努めました。卒業後は、実験で身につけたコンピュータの知識をいかして（現在の心理学実験の多くはコンピュータをもちいて行われています）、あるコンピュータ会社のシステム・エンジニアとして働いています。

「教育学コース」のＴくんは、演劇教育に強い関心を持っていました。彼は、インターンシップ制度（大学在学中の一定期間、国内外の企業・機関などで、実習的・研修的な就業体験をする研修制度）によって英国に留学し、現地で営まれている演劇教育に関する情報を収集し、また取り組みの実際にふれました。そして卒業論文では、「特別活動における演劇教育の可能性」というテーマのもと, ある中学校の「演劇の創造」をインタビュー、アンケートなどによって追跡し、その意義と課題を実証的に検討しました。現在では、ある県の中学校国語科教員として、特別活動の指導に、在学中に得た体験を十二分に活かしています。

また、Ｓさんは、知識詰め込み型教育を打ち破る手段として、NIE（Newspaper In Education）に注目し、それを卒業論文の題材としました。新聞を用いた子どもの主体的な学習のあり方を追究するために、彼女はまず、国内外における歴史の整理、他のメディアの教育利用との比較などによって、NIEの全体像を洗い出したのち、実際に新聞紙面の内容比較を試みたり、いくつかの中学校の実践事例を記述したりして、その実際と可能性を明らかにしていきました。この過程で培われたメディアの教育利用に関する理論的・実践的知見は、卒業後の仕事である社会教育主事補としての取り組みにとても役立ちました。

さて、「地理学コース」のＭさんもインターンシップ制度を利用して1年間台湾に行きました。その機会を利用して、台北近郊の工業都市の工場団地に数多く進出する外資系企業に、その進出動機、従業員の確保や経営や労働管理の実態について直接インタビュー、アンケート調査を実施しました。アンケートの回収がぎりぎりにずれこみ、最後は大学で幾晩も徹夜が続きましたが、すぐれた現地レポートを卒業論文として仕上げることができました。卒業後は貿易取引のベンチャー企業で、得意の中国語を武器にアジアを駆けめぐっています。

同じく「地理学コース」のＴさんは、フルートを吹くやさしい人かと思いきや、卒業論文では台風通過コースの違いによる降水分布を近畿地方に関して調べるという、文学部生としてはユニークな、扱いにくいテーマに取り組みました。周囲の心配をよそに、地方気象台に出向いては、膨大なデータを気象官の好意で集め、それを美しく図像データ化し、地形とコースの相関、非相関をみごとに求めることができました。そして卒業後は、何十倍もの難関をクリアして、気象予報士になったのです。

■言語文化学科 Language and Culture

激動する現代社会にあって未来の展望を切り拓くには、人類の歴史的営為の所産である文化を、言語を通じて根源的に解明し理解することがきわめて重要です。言語文化学科では、日本をはじめ世界中各地における、文学・思想・舞台芸術・映画などの言語を媒介とする精神文化のあらゆる領域について、普遍的、現代的な視点から総合的に研究しています。

「国語国文学コース」のＡくんは、文学部での学問を、オーケストラの指揮者にたとえます。レポートや卒業論文が自分なりの演奏の舞台だとすれば、講義・演習は、作品から立ち現れてくる《作者》の言動を、作品が生み出された時代の《読者》の一人として感じ取る練習だというのです。彼は近代文学研究志望でしたが、古典が中心の授業にも熱心に取り組み、作品の可能性を徹底的に引き出す感受性と、それを方向づける批評眼を養いました。卒業論文では窪田空穂の歌集を扱い、周到な読解と考証に基づいて作者の内面に鋭く迫りましたが、その成果は将来性を大いに期待させるもので、卒業後も大学院に進学して学問を続けています。

同じコースの第２部学生だったＫくんは、仕事と両立させながらの学生生活でしたが、講義や演習をおろそかにすることなく、度重なる発表を通じて調査の難しさを学びました。また、自主的に先学の論文や著作を読み進め、学問の方法を身につけていった彼は、本居宣長という、自分がより深く知りたいと思える対象に出逢います。宣長の『古事記伝』を取り上げた卒業論文は、明確な問題意識から出発し、綿密な調査に裏付けられた説得力に富むもので、高い評価を受けました。そんなＫ君は、卒業後いったん民間企業に就職しますが、もっと知りたい、学びたいという欲求断ちがたく、結局1年後、大学院に進むことになりました。

「中国学コース」のＡくんは、大学での《勉強》は、「自らで目標を立てて自主的に学べるかどうか」に尽きると言います。つまり、大学生活では、勉強以外にも学術的、世俗的なこと共に興味深いことが非常に多いので、学問への姿勢を確立させておかなければ、すぐに学問以外へと流されてしまいがちだというわけです。そして、大学で学ぶことは確かに始めは専門的で難しいし、本当に実社会で役に立つかどうかも疑わしいけれど、「自分が選んだ専門分野で、自分なりの結果を大成させる為に全力をつくすこと」は実社会のどんな分野に身を置こうとも成功を収める必要条件であり、学ぶことは無意味ではないことを肝に銘じて大学生活を送ってほしいと語ってくれました。

同じコースの第２部学生だったＢさんは、自分は決して優等生ではなかったけれど、中国学コースの授業をはじめ、教員免許取得のための国文の授業、博物館実習のための実習や授業など、充実した学問生活を送れたと言います。そして、振り返れば、規定の5年間プラス1年、計6年間という長い学生生活を送ることができたのも、この中国学コースの雰囲気のおかげ、勉強や研究に不可欠な真面目さ厳しさ勤勉さはもちろん、どのような研究にも対応してくれる懐の深さというものが自分を支えてくれたそうです。

「英米言語文化コース」のＳさんは元々文学好きでしたが、３回生の夏に語学留学したイギリスの大学での授業が、彼女の文学的探求心に決定的な火をつけたようで、４回生では教職科目をとりつつも、もっと深く研究したいと卒業論文テーマに取り上げたオルコットという作家の日記を貪るように読みました。自分らしさを見つけられるテーマに巡りあえた彼女は、大学院に進学、研究を継続しています。

もうひとり、別の大学を卒業後、編入学したＨさんは、以前の大学で学んだことをさらに広げようと英米言語文化コースでいろんな科目をとって勉強しています。卒業論文テーマで選んだアメリカ作家のメルヴィルについて指導の先生とキャッチボールをしながら、秋の公務員試験の勉強にも打ち込んでいる最中です。

卒業生のＡさんは現在中学の英語教師として忙しい日々を送っていますが、４回生の卒業論文作成にかけたエネルギーこそ、一生で一番貴重なものの一つだった気がしているそうです。

日本の古典文学、とりわけ万葉集に興味があった「ドイツ言語文化コース」のＡさんは、私立大学の日本文学科を卒業し、博物館学芸員の資格も取得していましたが、ドイツ語を履修したことをきっかけに、ドイツ語やドイツの文化についても専門的に学びたいという気持ちが強まり、大阪市立大学の文学部に編入学しました。在学中は、万葉集のドイツ語訳について、ドイツに行って直接資料を集め、原文と比較しつつ、比較文化論的な力作を卒業論文として書き上げました。そして、卒業と同時に、軽井沢の「絵本の森美術館」の館員に採用され、ドイツ語の能力やドイツ文化についての知識を生かして、グリム童話やドイツの絵本関係の展示など、企画運営の中心となって活躍しています。

一方、高校時代にドイツでの生活を体験したことからドイツに興味を持ち、独文を専攻した姉と同様に、自分も大学では独文で学ぼうと決めていたKくんは、教員やカリキュラムなどを調べて、大阪市立大学文学部を選びました。入学後は、歴史上の「魔女」とその文学での描かれ方に興味を持ち、魔女狩りを扱った小説『琥珀の魔女』を卒業論文の対象に選びました。さらに研究を深めるために研究者への道を志望したＫくんは、大学院に

進み、魔女狩り終息の原因を探索するうちに、ドイツ敬虔主義の役割に注目、日本ではほとんど知られていない「敬虔主義の女性観」をテーマにした修士論文を書き上げ、さらに後期博士課程で研鑽を積んでいます。

さて、漠然とフランスに憧れていたＴさんは、何となく「フランス言語文化コース」を選びましたが、せっかく専門生になったのだからと、一念発起してフランスに一年留学。そのときのホームステイ先での経験をきっかけに、異文化間コミュニケーションに関心を持つようになり、その結果、フランス人と日本人の心理的距離感について、アンケートを基にした卒業論文を書くことになりました。現在彼女は情報処理系の会社に勤めていますが、フランス学と共に学んだ自由な発想と異文化への眼差しは、社会でも大いに役立っています。

また、同じコースのＡくんは、入学当初は英文に進もうかと考えていましたが、新しく学んだフランス語の魅力に誘われてフランス言語文化コース生となりました。そこでフランス文学の歴史を学んでみると、哲学にも関心のあったＡくんの興味と一致する作家・思想家の多いことに驚きます。彼は結局、20世紀の大作家カミュの思想を卒業論文のテーマに選びましたが、そのテーマについてもう少し勉強を続けたくなり、大学院に進学しました。ただ、研究者になるつもりはなかったので、就職活動をおこない、専門を深めた自信を買われ就職。修士号を持った会社員として活躍しています。

「言語情報コース」のＭくんは、「情けは人のためならず」という諺――もちろん「親切は結局自分のためになるのだ」という意味です――について、「どうしてみんなはこの諺を誤解して用いやすいのだろう？」と疑問をもったところから、その点について考えてみたいと思うようになりました。そして、このような言葉遣いの用例を本やコンピュータを用いて検索し、また談話に関する論文を読んだ上で、卒業論文を書き上げました。問題点はあったものの、卒業論文の作成を通じて研究に興味を持った彼は、教員専修免許状をとるためにも大学院へ進学して、勉強を続けています。

最後に、「表現文化コース」のＮくんは、映画研究会に所属し、映画を含めた視覚表現に興味を持っていました。ですからもちろん、表現文化コースの多彩な授業の中でも特に映画論の授業が興味深かったそうですが、他の様々な文化現象に関しても視野を広げようとしていました。そして卒業論文では、岡崎京子の漫画『リバーズ・エッジ』を題材に、作者が映画のカメラに比較しうる「視点」の手法をいかに駆使して、「現実の読み替え」を読者に呈示しているかを論じた、コミック評論に挑みました。卒業後は、大学院に進んで研究を続けています。

このように、文学部で学べることがらは多種多様ですが、いずれの専門分野においても、人間と、人間の作りあげてきた文化を総体として深く理解しようとする姿勢、人の知恵や行動に関心をもち、そのすべてを肯定するという「ヒューマニズム」が根底にある点では共通しています。

大阪市立大学の文学部では、専門コースへの所属を決めるのは、１年次の冬ですが、これは、みなさんにとって良いことかもしれません。というのも、それまでに、いろいろなことを、昔からの枠にとらわれず、常に新鮮な視点で眺められるような基礎訓練を積んでいくことで、新たな関心領域との出会いがあるかもしれないからです。もちろん、専門コースに所属してからも、卒業してからも、「考える」ことから逃れることはできないでしょう。「考える」とは、人の生そのものだからです。とすれば、文学部とは、その「考える」ことについて考える学問の場であり、世界にあふれるフシギなこと、オモシロイこと、ムズカシイことを、すべて魅力的なグッズに変身させる魔法を身に着けるところなのです。

■第２部人文学科

第２部人文学科は2005(平成17)年４月に生まれました。それまで５年かかっていた第２部を、４年間で卒業できるようにあらためました。

人文学科は３つの専門領域からなりたっています。歴史文化領域は、日本・アジア・西洋の地域文化を歴史学、文化人類学などの視点から複眼的に学びます。人間行動学領域では、社会学・心理学・教育学・地理学を広く学ぶことにより、人間の行動の本質にせまります。言語文化・思想領域では、日本・東洋・西洋の文化と言語、思想の伝統を学び、思考力、理解力を養います。

各専門領域には２年次からわかれますが、定員はありませんので、希望する領域に自由に所属して研究することができます。特定の専門分野を掘り下げて学習することも、複数の分野を幅ひろく横断的に学ぶことも可能です。指導する教員は第１部と同じですので、よりいっそう少人数で、きめ細かな指導を受けることができます。第２部独自のユニークな科目も多く提供されています。

なお、人文学科では、高等学校教諭１種免許状（地理歴史・公民・国語）、中学校教諭１種免許状（社会・国語）、博物館学芸員資格を取得することができます。

文学部卒業生の主な進路（進学・就職）

2005年 3月卒業生	
（大学院）	大阪市立大学
（公務員・教員）	大阪市、大阪府、高槻市、亀岡高等学校
（銀行・金融）	東京三菱銀行、三井住友銀行、紀陽銀行、大阪市信用金庫、商工中金、中小企業金融公庫、新韓銀行
（保険）	日本生命、ニッセイ同和損害保険、富士火災海上保険、共栄火災海上保険
（運輸・通信）	西日本NTT、NTTドコモ関西、奈良交通、第一貨物
（百貨店・小売）	紀伊國屋書店、イオン、ヨドバシカメラ、キタムラ、三洋堂書店
（出版・印刷）	凸版、栄光、増進会、かみたに
（情報処理・ソフトウエア）	富士通、リコーソフトウェアー、UFJ日立システムズ、日生情報テクノロジー、住生コンピューターサービス
（教育）	NOVA、ジオス、志學館ゼミナール
（その他サービス）	ＪＡ兵庫中央会、サーベイリサーチセンター、ぎゅあん
（食料品）	ヤマザキナビスコ、エーデルワイス、九鬼産業
（旅行）	JTBワールドバケーションズ、関西エアポートエージェンシー、郵船航空サービス
（その他製造）	日立製作所、田辺製薬、日本メナード化粧品、東洋ステンレス
2004年 3月卒業生	
（大学院）	大阪市立大学、同志社大学、鳴門教育大学、兵庫教育大学
（公務員・教員）	国土交通省、東京国税局、郵政公社（近畿支社）、大阪航空局、大阪労働局、京都市、大阪市、大阪府、大阪市中学校、薫英女学院
（銀行・金融）	三井住友銀行、和歌山銀行、農林漁業金融公庫
（証券）	日興コーディアル証券
（百貨店・小売）	高島屋、紀伊國屋書店、イレブン
（カタログ・通信販売）	千趣会
（出版・印刷）	共同印刷株式会社
（情報処理・ソフトウェア）	エム・アイ・ティー、TIS、インテック、ITS
（貿易）	大西賢株式会社
（教育）	NOVA、ジャストミートコーポレーション、寺子屋グループ、あおい幼稚園
（コンサルタント）	野村総合研究所、日本駐車場開発
（その他サービス）	類グループ、ライト、松屋フーズ、京都吉兆、南北
（食料品）	トータルアクセスカンパニーズ、ディアジオ モエヘネシー
（旅行）	アイデム
（人材派遣）	グッドウィルグループ
（建築）	上海前川建築公司
（繊維・織物）	セーレン、ミキハウス、住之江織物、シキボウ
（その他製造）	川崎重工、近畿三菱自動車、ノチダ、日立製作所、三菱電機

大阪市立大学大学院
文学研究科

専攻と専修

大学院文学研究科

■哲学歴史学専攻
哲学専修
日本史学専修
東洋史学専修
西洋史学専修

■人間行動学専攻
社会学専修
心理学専修
教育学専修
地理学専修

■言語文化学専攻
国語国文学専修
中国語中国文学専修
英語英米文学専修
ドイツ語ドイツ文学専修
フランス語フランス文学専修
言語情報学専修
表現文化学専修

■アジア都市文化学専攻

さらに深く「考える」

大学に入っていろいろな学問にふれ、実際に自分が勉強していくうち、もっと勉強を続けたいと思うようになるかもしれません。大阪市立大学文学部と同じ先生たちが担当する大学院文学研究科には、学部の履修コースを基本とした３専攻１５専修の分野と、大学院のみの分野であるアジア都市文化学専攻が置かれており、さらに高度な勉強を続けることが可能です。実際、最近では大学院に進む人も増えています。しかも、興味深いことには、学部を卒業して就職したものの、会社を辞めて大学院に入学してくる学生も少なくないのです。学問をするということの面白さは、社会に出ることによって再認識されるのかもしれません。それほど大学院は魅力的な場所であるのです。

学部が基礎編とすれば、大学院は応用編にあたります。大学院では、学部よりいっそう少人数の教育で、先生からみっちりと、一人前の研究者へ向けた指導を受けることになります。そして、後期博士課程に進むと、博士論文を仕上げることが目標となります。もちろん大学院に入学した全員が研究者になるのではなく、「高度職業人」として社会に出て行く人もいます。

文学部は、大阪市立大学大学院文学研究科・文学部を正式名称としており、これは大学院教育に従来以上の重みをもたせようという大阪市立大学全体の方針に連動しています。とくに文学研究科・文学部では、「都市、大阪、文化」をキーワードとし、大阪という立地を活かした都市文化研究を、国際的な観点から推進しており、文部科学省が世界的な研究教育拠点づくりをめざして支援する「21世紀COEプログラム」で全国20拠点の一つに選ばれるなど、高い評価を受けています。こうした研究の最前線に立つのが、教員と、そしてあなたたち学生なのです。学部を卒業したら大学院進学というのも、将来のひとつの選択肢なのです。

■アジア都市文化学専攻 Asian Culture and Urbanism

アジア都市文化学専攻は、大学院にのみ設置されたコースで、日本でも他に例を見ないユニークな内容となっています。アジア有数の大都市である大阪という絶好のロケーションを足場に、都市というフィルターを通してアジアの文化を考察し、その独自性や多様性を解明しようとしています。

アジアは私たちにとって身近な地域であり文化なのですが、大学というアカデミズムの世界では、依然として欧米偏重の思考様式を重視する傾向にあります。それでは日本と深いかかわりのあるアジア、特に現代のアジアをきちんと捉えることはできません。本専攻は、そのような反省の上に立って、アジアをその内側から見据えるための方法論を打ち立てようとしています。特に、政治学や経済学に較べ、文化・思想・民族への多角的な理解や研究が立ちおくれている現状を打破しようとつとめています。研究が手つかずの分野も数多く、従って、見知らぬ領域に初めて足を踏み入れる期待と興奮を味わうことができるのは間違いありません。

本専攻の教育上の特色は、フィールドワークの重視、アジア諸民族の言語（日本語を含む）への積極的なアプローチ、そして社会との密接な関係の形成にあります。フィールドワークは、現場に赴き、身体全体を通して学問的な知を獲得する方法です。知ることと同時に感じることの大切さを学びます。また、調査に出かける諸君は、当然ながら当該言語をマスターしておかねばなりません。アジアの言語を少なくともひとつ習得することは、アジアの文化を理解するための重要な起点となるはずです。さらに、理論的研究にとどまらず、それを社会に生かすための実践知を展開することも大切な課題です。そのために、一般学生枠以外に、社会人枠（文学研究科では本専攻のみ）、留学生枠も設け、社会との様々な接点をもとうとしています。ここでは様々な人と出会えます。まさに異文化の坩堝といってもいいでしょう。そして研究者だけではなく、行政や文化機関、ＮＧＯなどで働く高度な専門的職業人を養成するのも、本専攻の目的です。

教員スタッフは、それぞれ文学、思想史、人類学、歴史学、都市学、音楽学、言語学などのスペシャリストで、実に多彩な陣容となっています。なんでもありという観を呈していますが、アジア文化の多層性に照応した立体的な配置になっているのです。ここでは極めて多様な教育を受けることができます。また、異なったジャンルの教員や学生がひとつに集っているからこそ、「対話」が非常に重要な方法となっています。私たちは対話型の学問を生み出そうとしています。それは他者に対する創造的な想像力を養うことに他なりません。専門領域の特性を生かし、しなやかで確かに共有できる方法論の模索。ここから私たちは出発し、新しい学問の成果を世に問おうとしています。

清新な気風を反映して、学生のテーマも「中国におけるエコツーリズム」「現代社会の家族生活」「近郊都市のサウンドスケープ」「都市文化としての和太鼓」「ソウルのストリート・ミュージック」「中部ジャワの舞踊の変容」など、大きく多彩に広がっています。先輩たちは、ソウルに、上海に、シンガポールに、バンコックにと、アジアを生き生きと駆けめぐっています。アジアの人々とともに食べ、歌い、踊り、議論をしながら、成果を求めて真剣で楽しい旅をしています。そんな学問の醍醐味に触れていただきたいと、切に願っています。学部を卒業したら、ぜひともアジア都市文化学へ！

哲学歴史学科

■哲学・哲学史コース

薮木 栄夫（ヤブキ ヒデオ）教授
形而上学批判、カント哲学の体系的研究、人間存在論
❑『カントの方法』法政大学出版局、1997

塩出 彰（シオデ アキラ）教授
プラトンおよびアリストテレスを中心とした古代ギリシア哲学および倫理思想

中才 敏郎（ナカサイ トシロウ）教授
論理学を基本とする分析哲学の認識論、心身問題や人格の同一性などの心の哲学
❑『心と知識』勁草書房、1995

高梨 友宏（タカナシ トモヒロ）助教授
現象学的美的価値論、京都学派の芸術論の研究
❑『美的経験の現象学を超えて』晃洋書房、2001

■倫理・宗教コース

美濃 正（ミノ タダシ）教授
現代英米哲学。特に、倫理学、心の哲学、言語哲学、および科学哲学

仲原 孝（ナカハラ　タカシ）助教授
宗教と哲学の関係。カントやハイデガーを中心とする近現代ドイツの宗教哲学の研究

土屋 貴志（ツチヤ　タカシ）助教授
倫理学、医療倫理学（現代医療に関する倫理的諸問題の研究）

■日本史コース

栄原 永遠男（サカエハラ トワオ）教授
古代の租税や物資・交易などの経済史。国家仏教の実態（正倉院文書の分析を通じて）
❑『奈良時代写経史研究』塙書房、2003

塚田　孝（ツカダ タカシ）教授
近世（江戸時代）の巨大都市である江戸や大坂の民衆生活のあり方（都市法制、蔵屋敷、遊女、目明し等）。
和泉地域の寺院社会史
❑『歴史のなかの大坂』岩波書店、2002

仁木 宏（ニキ ヒロシ）助教授
中世～近世初頭の近畿地方を中心とする、都市や村落の歴史（京都、寺内町、城下町など）
❑『戦国時代、村と町のかたち』山川出版社、2004

岸本 直文（キシモト ナオフミ）助教授
前方後円墳を中心とする古墳および副葬品による古墳時代の政治・社会史

■世界史コース

中村 圭爾（ナカムラ ケイジ）教授
中国の三国・南北朝時代の政治・社会史（特に貴族制の分析）。金石・考古史料を活用した研究
❑『六朝貴族制研究』風間書房、1987

井上 徹（イノウエ トオル）教授
中国近世・近代史。宗族、民族、宗教を中心とする社会史
❑『中国の宗族と国家の礼制』研文出版、2000

早瀬 晋三（ハヤセ シンゾウ）教授
海域東南アジアの歴史（海洋民や小民族）。
フィリピン・日本関係史
❑『海域イスラーム社会の歴史』岩波書店、2003

平田 茂樹（ヒラタ シゲキ）助教授
中国近世史（科挙・官僚制を中心とする政治構造の歴史）
❑『科挙と官僚制』山川出版社、1997

井上　浩一（イノウエ コウイチ）教授
ビザンツ帝国（東ローマ帝国）の政治と社会（皇帝・貴族から農民・市民にいたる諸階層が織りなす歴史）
❑『ビザンツとスラヴ』中央公論新社、1998

大黒 俊二（オオグロ シュンジ）教授
中世・ルネサンス期のイタリアおよび地中海世界の社会史、経済史

中野 耕太郎（ナカノ コウタロウ）助教授
アメリカ現代史。国民意識の生成と福祉国家の展開

人間行動学科

■社会学コース

谷 富夫（タニ トミオ）教授
都市社会学、民族関係論（大都市圏の民族関係に関する地域研究・生活史研究）、宗教社会学
❑『民族関係における結合と分離』（編著）ミネルヴァ書房、2002

進藤 雄三（シンドウ ユウゾウ）教授
理論社会学・医療社会学（ポストモダン論、医療専門職論）
❑『医療社会学を学ぶ人のために』世界思想社、2003

土屋 礼子（ツチヤ レイコ）教授
メディア論、歴史社会学（プロパガンダ研究、大衆ジャーナリズム、視覚メディアの歴史）
❑『大衆紙の源流』世界思想社、2002

石田 佐恵子（イシタ サエコ）助教授
文化理論、現代文化研究（メディア・ジャンル研究）、知識社会学
❑『クイズ文化の社会学』世界思想社、2003

木村　好美（キムラ ヨシミ）講師
計量社会学、社会階層論、社会調査法（高齢者の意識や行動と社会階層要因の関係）

■心理学コース

湯川 良三（ユカワ リョウゾウ）教授
発達心理学：認知、言語、記憶の発達、発達の比較文化的研究
❑『新・児童心理学講座 第4巻 知的機能の発達』（編著）金子書房、1993

伊藤 正人（イトウ マサト）教授
学習心理学：実験的行動分析、ヒトと動物の意思決定、セルフコントロールと衝動性
❑『行動と学習の心理：日常生活を理解する』昭和堂、2005

池上 知子（イケガミ　トモコ）教授
社会心理学：社会的認知、偏見とステレオタイプ、アイデンティティの国際比較研究
❑『社会的認知の心理学』（共著）ナカニシヤ出版、2001

辻本 英夫（ツジモト ヒデオ）助教授
性格心理学：性格の構造の分析とその測定、行動の個人差と性格との関連、心理データ解析法

川辺　光一（カワベ　コウイチ）講師
生理心理学：学習・記憶現象の脳内機構、心と身体（脳）、行動と薬物

■教育学コース

細井 克彦（ホソイ カツヒコ）教授
教育計画の理論と実際、教育の法と行政および制度、現代日本の高等教育行政
❑『戦後日本高等教育行政研究』風間書房、2003

堀内 達夫（ホリウチ タツオ）教授
近代社会の教育、教育と雇用・キャリアの関係、技術・職業教育の国際比較
❑『専門高校の国際比較』（編著）法律文化社、2001

湯浅 恭正（ユアサ　タカマサ）教授
特別なニーズ教育、インクルージョン教育、生活指導の研究
❑『障害児の教授学入門』（編著）コレール社、2002

添田 晴雄（ソエダ ハルオ）助教授
比較教育文化史、教育・学習における話すことと聞くことの研究、いじめ問題の国際比較研究
❑『世界のいじめ』金子書房、1998

木原 俊行（キハラ トシユキ）助教授
授業研究・カリキュラム開発を通じた教師の成長、情報技術の利用による授業改善の研究
❑『授業研究と教師の成長』日本文教出版、2004

■地理学コース

山野 正彦（ヤマノ マサヒコ）教授
文化地理学、景観論と地理思想の研究
❑『ドイツ景観論の生成』古今書院、1998

富田 和昭（トミタ カズアキ）教授
東京圏や京阪神圏など大都市地域を対象とした都市経済地理学、情報サービス業など第３次産業の経済地理学
❑『大都市圏の構造的変容』古今書院、1995

大場 茂明（オオバ シゲアキ）教授
日本・ドイツにおける都市政策の比較研究（土地・住宅政策、都市開発・再開発事業、居住形態の地域比較等）
❑『近代ドイツの市街地形成』ミネルヴァ書房、2003

水内 俊雄（ミズウチ トシオ）教授
都市の社会問題・住宅問題の現状や歴史的経緯についての政治・社会地理学的研究
❑『空間の社会地理』（編著）朝倉書店, 2004

山崎 孝史（ヤマザキ タカシ）助教授
グローバリゼーションや国際情勢の変化に対する地域社会の政治的反応。沖縄の政治地理学的研究

言語文化学科

■国語国文学コース

毛利 正守（モウリ マサモリ）教授
古代のことばの研究（ことばの音や意味の変遷など）

村田　正博（ムラタ　マサヒロ）教授
古代の文学者（人麻呂や家持ら）は詩歌にどんな志を託したか、我々はそれをいかに受け取るか
❑『萬葉の歌人とその表現』清文堂、2003

丹羽 哲也（ニワ テツヤ）助教授
現代語の意味と文法。日常我々が使っていることばがいかなる体系と豊かさを持ち、それが変化してきたか
❑『日本語の題目文』和泉書院、2005

小林 直樹（コバヤシ ナオキ）助教授
中世の説話と説話集の研究。作品世界とその背景をなす文化的基盤
❑『中世説話集とその基盤』和泉書院、2004

金光 桂子（カナミツ ケイコ）講師
中古から中世にかけての王朝物語（物語文学の展開とその限界）

■中国学コース

山口 久和（ヤマグチ ヒサカズ）教授
明清時代を中心とする中国近世思想史
❑『章学誠の知識論』創文社、1998

齋藤 茂（サイトウ シゲル）教授
唐宋文学を中心とした中国古典文学
❑『妓女と中国文人』東方書店、2000

松浦 恆雄（マツウラ ツネオ）教授
19世紀末以降の中国近現代文学、および演劇

岩本 真理（イワモト マリ）助教授
中国語の語彙、語法史研究。近世から現代に至る変遷、および江戸時代に日本人が学んだ中国語（唐話）との関連性

張 新民（チョウ シンミン）助教授
現代中国文化論、映画論

大岩本 幸次（オオイワモト コウジ）講師
近世を中心とした中国語音韻学

■英米言語文化コース

山崎 弘行（ヤマサキ ヒロユキ）教授
近現代の英国・アイルランド作家の他者意識に関する総合研究および文学・文化理論
❑『英文学の内なる外部 ― ポストコロニアリズムと文化の混交 ―』松柏社、2003

市川 美香子（イチカワ ミカコ）教授
ヘンリー・ジェイムズを中心とする自伝・伝記文学、アメリカの小説（19・20世紀）
❑『ヘンリー・ジェイムズの語り ― ―人称の語りを中心に』大阪教育図書、2003

瀬戸 賢一（セト ケンイチ）教授
意味論、レトリック論、メタファー論（英語ということばが実際のコンテクストのなかでどのような意味を持つか）
❑『よくわかる比喩』研究社、2005

杉井 正史（スギイ マサシ）教授
シェイクスピアの喜劇を中心とするイギリス演劇（上演当時の政治・宗教との関係）
❑『シェイクスピア喜劇の隠喩的メッセージ』大阪教育図書、2000

田中 孝信（タナカ タカノブ）助教授
ディケンズを中心とする18～19世紀イギリス小説

古賀 哲男（コガ テツオ）助教授
アメリカの詩およびポストモダン小説。北米の芸術・文化論

Ian Murray RICHARDS
（イアン・マレー・リチャーズ）助教授
英語圏の文化研究（ことばと文化の関係）
❑ *Dark Sneaks In: Essays on the Short Fiction of Janet Frame,* Lonely Arts, 2004

岩田 彩志（イワタ セイジ）助教授
語彙意味論を中心とした形式と意味の対応に関する研究。構文文法
❑ *A Lexical Network Approach to Verbal Semantics,* 開拓社、1998

■ドイツ言語文化コース

松村 國隆（マツムラ クニタカ）教授
ドイツ語圏に属するオーストリア（とくにウィーン）の文学・文化
❑『オーストリア中世歌謡の伝統と革新』水声社、1995

広瀬 千一（ヒロセ センイチ）教授
18・19世紀のドイツ演劇（ゲーテ、シラー、レンツ、クライストなど）、演劇論
❑『ドイツ近代劇の発生』三修社、1996

寺井 俊正（テライ トシマサ）教授
世紀転換期以降の現代ドイツ文学（特にホフマンスタールを中心に、詩・詩論・文学理論など）

神竹 道士（カミタケ ミチオ）助教授
16世紀から今日までのドイツ語の変遷および文法理論の歴史的研究
❑ *Johann Jakob Hemmer und sein Beitrag zur Verbreitung der neuhochdeutschen Schriftsprache in der Pfalz,* Peter Lang Verlag, 1987

田畑 雅英（タバタ マサヒデ）助教授
19世紀ドイツ文化、特にロマン派の作家ティークとワーグナーのオペラ

Klaus BLEX（クラウス ブレックス）助教授
ドイツ語教授法（DaF）および第二言語習得の研究
❑ *Zur Wirkung mündlicher Fehlerkorrekturen im Fremdsprachenunterricht auf den Fremdsprachenerwerb,* Bielefeld, 2001

■フランス言語文化コース

小西 嘉幸（コニシ ヨシユキ）教授
ジャン・ジャック・ルソーを中心とした18世紀の文学・思想。18世紀を中心とした絵画・芸術理論。文学の理論一般
❑『テクストと表象』水声社、1992

中島 廣子（ナカジマ ヒロコ）教授
19世紀から20世紀の初頭にいたる世紀転換期の文学・文化。想像力の文学としての幻想文学・SF
❑『「驚異」の楽園』国書刊行会、1997

Pierre LAVELLE（ピエール ラヴェル）教授
日本語とフランス語の両言語圏の、言語および文化の比較。日本近代史
❑ *Occitanie: Histoire politique et culturelle,* Institut d'Etudes Occitanes, 2004

津川 廣行（ツガワ ヒロユキ）教授
ジイド、ヴァレリー、プルースト、クローデルを中心としたフランス20世紀小説および思想。フランス音楽論
❑『ジイドをめぐる「物語」論』駿河台出版社、1994

福島 祥行（フクシマ ヨシユキ）助教授
フランス語を中心とする文法とコミュニケーション研究。コンピュータを用いた仏語教育方法研究。劇場論

■言語情報コース

小林 標（コバヤシ コズエ）教授
ラテン語とその子孫（ロマンス諸語）文献の比較考察
❑『ローマが残した永遠の言葉』NHK出版、2005

衣笠 忠司（キヌガサ タダシ）教授
日英比較を中心とした言語構造分析および言語情報（コーパス）に基づく語法研究
❑『語法研究と言語情報』英宝社、1998

関 茂樹（セキ シゲキ）教授
言語にみられる形式と意味との対応関係を機能的観点から研究
❑『英語指定文の構造と意味』開拓社、2001

井狩 幸男（イカリ ユキオ）助教授
乳幼児の母語獲得のメカニズム研究、およびその成果の第二言語習得への応用

山崎 雅人（ヤマザキ マサト）助教授
アジア比較言語研究、中国音韻論、満州語の研究

田中 一彦（タナカ カズヒコ）助教授
英語と日本語の時制・相に関わる問題（間接話法構文や時の副詞節中の時制のふるまい方の比較等）

■表現文化コース

浅岡 宣彦（アサオカ ノブヒコ）教授
異文化の交流および文学を素材にした芸術ジャンル相互の交流。ロシア文化論。プーシキンを中心とする19世紀ロシア文学

荒木 映子（アラキ エイコ）教授
文学・文化批評理論、芸術・文化・制度の記号論、比較文化論（特に、世紀末から現代にかけての英語圏を中心としたヨーロッパの文化）
❑『生と死のレトリック』英宝社、1996

三上 雅子（ミカミ マサコ）助教授
日本と英米・ヨーロッパ（特にドイツ語圏）表現文化比較、現代演劇論

野末 紀之（ノズエ ノリユキ）助教授
芸術・メディアを通じての西欧近代の知・感受性の変容、身体と芸術表現、19世紀末文化論

高島 葉子（タカシマ ヨウコ）助教授
比較文化、民間説話・民間伝承（特に妖精伝承）の比較文化的研究

海老根 剛（エビネ タケシ）講師
文化理論、映画を中心とする映像論、現代ドイツ研究

アジア都市文化学

高坂 史朗（コウサカ シロウ）教授
日本思想史、近代日本哲学、近世東アジア比較思想史、近代化論
❑『近代という躓き』ナカニシヤ出版、1997

中川 眞（ナカガワ シン）教授
東南アジアの民族音楽・舞踊研究、サウンドスケープ論
❑『平安京　音の宇宙』平凡社、1992

野崎 充彦（ノザキ ミツヒコ）教授
朝鮮半島の都市の生活空間、古典文学および伝統文化論（民間信仰、風水ほか）
❑『コリアの不思議世界』平凡社、2003

中生 勝美（ナカオ カツミ）助教授
社会人類学、中国地域研究、日本旧植民地研究
❑『植民地人類学の展望』風響社、2000

橋爪 紳也（ハシヅメ シンヤ）助教授
アジア諸都市にかんする観光学的研究、都市文化論
❑『日本の遊園地』講談社現代新書、2000

多和田 裕司（タワダ ヒロシ）助教授
アジア諸地域の文化人類学的研究、現代マレーシアにおけるイスラームと政治
❑『マレー・イスラームの人類学』ナカニシヤ出版、2005

２００５年 ８月 現在